

山田みやこの活動報告

令和8年6月7日(日)

認定特定非営利活動法人

青少年の自立を支える会 講演会に参加

「パーマネンシー保障のために」

理事長 福田雅章さんより

現在 自立援助ホーム 星の家 (H9～)
ファミリーホーム はなの家 (H26～)
子どもの居場所 月の家 (H26～)
当事者サロンだいじ家 (H22～)
ママと赤ちゃん家 (R1.12～) を運営

児童養護施設の入退所からみえることは、家庭養育優先原則の中で、近年(R3以降から)施設入所が上まわっている。

児童自立生活援助事業においてR6年10月時点で、10年前から家庭養育では限界で、施設入所が4倍になっている。

児童養護施設の高校卒業者の4割以上が進学しているが、栃木県においては、平成28年度以降高卒後進学した77人中26人(34%)が中退している。

かつて中退の背景は金銭的なものだったが、学費や生活支援費の拡充で、金銭的問題でないとしたら何があるのか。

施設での暮らしは、施設職員や他児との中で自身の存在を確認できるが、そこを離れると、
「自分の人生を作っていかなければならない」
「どうなるのだろう」
「自分は必要とされているのか」と不安になる。

「頑張って何になる」と思うのかもしれない。
物理的には孤独・孤立していなくても、彼らの心にある「孤独・孤立」を埋めていくのは用意された支援制度では足りない

社会的養育は、子どもの育ちの観点から「時間軸」で支援を考えることも必要



パーマネンシー保障

子どもが胎児期から社会的自立に至るまで、地域にあって一貫して子どもに関わり、保護者とパートナーシップを組んで共に子どもを育てていこうとする組織や人が求められている。

必要に応じて支援を届け、危機に瀕しては社会的養護(施設や里親)につなぎ、親子の再統合を目指していく。

再統合ができていなくても、その家庭に関わり続ける人が求められる

「月の家」(児童育成支援拠点事業)

途切れることない支援
寄り添い共に行動する存在
休息の場であること

「ママと赤ちゃん家」

特別な「専門的介入」を目指すのではなく
当たり前の日常に寄り添う
小学校の入学式に付き添い、成長を祝う
食事が作れないほど疲れた時に、台所に立つ
実家のように穴をまくって帰れる場を保障する

今までの事業を通して、
「こういう自分でいい」と思える場
自分を許すための「さりげない闘い」
虐待の連鎖を断ち切る、虐待しない親に

これからの自立観は、
適切に他者依存できる
できない自分を受容できる（自己肯定感）
永続的なつながりの中にいる（パーマネンシー）

一本の太い綱にぶら下がるよりも、無数の網目でやさしく受け止めるハンモックのよう
なネットワークが「パーマネンシー（永続的なつながり）」を保障
生まれ育った地域で自立の準備をしていくことが大切

支援者から「共に生きる人」へ

※緩やかな支援ゆえにずーっといたいと思う子どもたち
でも、支援を待つ待機児童が多い

大人の虐待による心の傷は、よき大人との出会いがなければ回復しない
「子どもの居場所」は、これからの社会的養育の最前線